

歴史のまち、羽曳野 6 仏教文化の新しい風

仏教の伝来

仏教がわが国に公式に伝わったのは、今から1,450年ほど前、百済から金銅製の仏像や経典がもたらされた時のこととされています。その後、仏教の受け入れに積極的な蘇我氏と、これを拒む物部氏らによるせめぎ合いが長く続きましたが、587年に蘇我馬子が物部守屋を滅ぼすと、その信仰は急速にひろまっていきました。

翌年の588(崇峻天皇元)年には、馬子の発願による日本で最初の本格的な寺院、飛鳥寺の建設が現在の奈良県明日香村で始まり、7世紀の初め頃には、厩戸皇子(聖徳太子)による斑鳩寺(法隆寺)や四天王寺の建立が続きます。これにならうように、各地の有力氏族も寺院の造営に乗り出し、624(推古天皇32)年には、その数は46か寺にも上ったと言われています。

高くそびえる五重塔、整然と瓦を葺いた大きな屋根、大陸風の建物を初めて目にした人々の驚きは、どれほど大きかったことでしょう。

古代寺院を語るもの

羽曳野市域でいち早く建立された寺院の一つ、古市2丁目の西琳寺は、7世紀前半(およそ1,370年前)に本格的な堂塔の建設が始まっています。現在、西琳寺の境内に残っている巨大な石は、塔の中心を貫いている心柱を支える礎石です。差し渡し3.2m、厚さ1.95mもあり、重さは20tを超えられます。平らな上面の中央に掘られた直径75cm、深さ41cm



の丸い穴は、心柱の根元をはめ込むソケットの役を果たすものですが、興味深いのは四方に小さく張り出した部分があり、全体が花びらのような形に見える点です。この張り出しに細い柱を立てれば、ちょうど添え木のように心柱の根元の周囲をしっかりと固定することができたのでしょう。同じようなつくりの礎石は、今のところ野々上5丁目にある野中寺の他に、奈良県の法隆寺若草伽藍、尼寺廃寺、橘寺に限ら

れています。

市役所の1階で展示されている鷗尾(屋根を飾る瓦のひとつ)も、西琳寺の大きさ、華麗さを今に伝える重要な遺物です。高さ1.4mもある大きさもさることながら、他にはあまり例のない蓮の花や火焰の浮き彫りの表現は仏像の造形を思わせ、仏師によってデザインされたことが想像されます。突如として現れた仏教的世界が、世の中の大きな変化を印象付けたことでしょう。

礎石の上に建つ瓦葺きの建物や堂内に安置された仏像、そして仏教の思想は、新しい技術、新しい文化を羽曳野の地に広めることになり、それはさまざまところで、形を変えて現在にも受け継がれています。

多くの労力、高い技術によって古代寺院を建てたそのエネルギーは、これからも羽曳野で受け継がれていくことでしょう。

(世界遺産登録準備室)

サラダボール

「障がい者の方々との出会い」

福祉に携わるようになり20年あまり。私は多くの人たちと出会いました。

その中には、障がいをもつ方もおられ、何事にも一生懸命取り組まれている姿をたくさん見てきました。

ある半身まひの方は、片手で家事をこなす。パソコンの指導もされています。誰に対しても笑顔で思いやりの心をもって接しておられ、同じ障がいをもつ方のよき相談相手となっておられるようです。今では、車の免許も取得され、家族や友人の送迎もされているということです。

また、シニアカー(ハンドル形電動車いす)を使用されている方は、以前よりも行動範囲が広がり、前向きな生き方になったとのこと。例えば、スー

パーマーケットに行って買い物をし、料理を作る楽しみを知り、家事をする喜びを得られました。他にも、新たな趣味を生活に取り入れ、有意義な日々を送られている姿は、一日一日を大切に過ごす喜びにあふれています。

私はというと、ボランティアとしてみなさんと一緒に旅行に参加し、ともに時間を過ごすことで信頼関係を築くことができるようになり、喜びや楽しみをともに分かち合えるようになりました。旅先での観光やバスの中で過ごす時間、一緒に温泉へ入り汗を流すことがとても楽しい時間です。そのような時間を過ごす中で、今では、自然にお互いが助け合うことができる仲間となりました。

最初は、「何かお手伝いできることがあれば」という気持ちから始めたボランティアですが、厳しいりハビリにもへこたれない前向きな姿勢、命を大切に一歩ずつあゆまれる姿に、気がつく私の方がはげまされ、元気をもらってました。

障がいは、一生のうちにだれにでも生じることであり、決して特別なことではありません。同じ社会に暮らす仲間としてお互いに支え合うことはとても大切なことだと思います。

これからも、みんながしあわせに暮らせるように、互いの人権を尊重する気持ちを持って行動していきたいと思っています。

(人権推進課)